



その6

# 岡田 逸

—おかだいつ—

(平成21年11月1日号—第263号)



逸は、小磯平左衛門の娘として京都に生まれました。花山院常雅[かざんいんときまさ]の娘敬姫[けいひめ]に仕え、重用されます。明和8年(1771)敬姫が、蝦夷[えぞ]松前藩主松前道弘に嫁ぐ際、聡明さを買われ、侍女として同行しました。しかし、安永6年(1777)敬姫が亡くなったため、逸は同僚2人とともに京都へ帰ります。のち、岡田本房[ほんぼう] (前号参照) に嫁ぎ、寛政2年(1790)松前からの帰途の様子を、道中で詠んだ61首の和歌を交えて著した紀行文『於[お]くのあら海』を刊行しました。この書は、当時、広く読まれたと考えられ、現在では『江戸時代女流文学全集』第3巻におさめられています。



岡田逸直筆の短冊  
(市史資料室所蔵)

江戸後期の文人・紀行家として著名な菅江真澄[すがえますみ]は、天明8年(1788)から松前に逗留し、藩主道弘の継母文子[あやこ]を初め、藩上層の家臣と和歌を介して頻繁に交わっていました。文子の館で歌会が盛んに開かれた様子は、彼の歌日記『ちしまのいそ』に記されていますが、しばしば河内国二ノ宮法楽[ほうらく]和歌と同じ歌題で詠んでいます。このことは、和歌を通して文子と逸の交流が続いたことを示唆しており、翻ってみれば、船橋村の二ノ宮神社を中心とした当地の文人グループの活発な活動を裏づけるものでもあります。

※松前での歌会の様子や文子と逸との交流は、細川純子著『ちしまのいそ』の和歌世界<『真澄学』第4号所収>を参考にしました。